

---

# フォーゼ・オーズ・ゴークイジャー feat ゴセイジャー オールヒーロー大決戦

赤城 聡真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フォーゼ・オーズ・ゴーカイジャー feat.ゴセイジャー  
オールヒーロー大決戦

### 【Nコード】

N0504Z

### 【作者名】

赤城 聡真

### 【あらすじ】

大ショッカーが世界を征服しようと襲撃にやって来た。それを阻止すべくすべての平成ライダーが集まった。結果、大切な物を失うというかたちでライダー側の勝利に終わった。

数年後、新たな仮面ライダー、フォーゼが生まれその物語が進んでいくはずだった。しかし、倒されたはずの大ショッカーが『ショッカー帝国』として蘇り再び世界を我が物にしようとする。フォーゼはライダーとして戦おうとする。そして、その戦いはあの『豪快な

奴ら』までをも巻き込む大事件へと発展していく！  
世界を守るため全てのライダーと全てのスーパー戦隊が集結する！  
はたして世界の運命は！？

## プロローグ（前書き）

初小説です！文章力はまったくありませんが頑張っていきたいと思っています。

ちなみに今回はスーパー戦隊は登場しません。

次回から出来るだけだせるようにしますのでどうかご理解を！

## プロローグ

「……とある世界……」

今、この世界で起きていることはまさに：戦争だった。全世界の悪が大団団結した秘密結社『大シヨツカー』が地球を征服しようと襲撃してきたのだ。

「キヤー！」

「に、逃げる！」

戦う力ない人々はただ逃げるしかなかった。

「ハツハツハツ、愚かな人間共が！今更何処に逃げても遅いというのに。もうすぐ我等大シヨツカーがこの世界を征服し地球で最も迷惑な存在となつてやるのだ！」

大シヨツカーの幹部アポロガイストが高らかに笑う。「さあ行け！シヨツカー戦闘員！人間共に目にもものを見せてやれ！」

「……イー！……」

アポロガイストの命令でシヨツカー戦闘員たちは逃げ惑う人々に襲い掛かるうとする。

その時、

「待て！」

何処からか声が聞こえシヨツカー戦闘員たちや怪人たちの動きが止まる。

怪人たちが声のしたほうを振り向くとコツテに向かつて何か飛んで来る。その何かは地面に落ちた瞬間、

ドカーン！

と、爆発が起こる。

突然起きた爆発で土煙が舞う。何が起きたのかわからない怪人たち

は混乱するなか、アポロガイストは何も言わずただ土煙の方を見ていた。その先にいくつかの人影が見える。その数は何十人、嫌：何百人といる。その何百人という人影は豪快なバイクのエンジン音を響かせながら大シヨツカーの怪人たちに向かつて行った。

そして、その人影が土煙から姿を現した。その姿は様々だった。

クワガタの様な仮面の戦士、龍の様な仮面の戦士、鬼の様な仮面の戦士、カブトムシの様な仮面の戦士、コウモリの様な仮面の戦士、体の左右が黒と緑に分かれた仮面の戦士、体の頭、胸、足と三等分された仮面の戦士など他にも大勢いる。「来たか…」

アポロガイストは待っていたと言わんばかりにニヤリと笑う。

そして、先頭を切っているクワガタの様な仮面の戦士はバイクに跨がりながら叫ぶ。

「大シヨツカー！お前たちの好きにはさせない！」

「ふんっ！貴様らごときが我等に勝てると思っているのか！愚かな！」

アポロガイストは両手を広げ「いでよ！」と叫ぶと回りに銀色のオーロラが現れてその中からまた大量のシヨツカー戦闘員や怪人たちが出てきた。

「どうだ！それでも貴様らは我等に勝てると言うのか！」

怪人たちの数は明らかに仮面の戦士たちの数を圧倒していた。

しかし、戦士たちは誰ひとり諦めようとはしない。

「それがどうした！」「俺たちは決して悪には屈しない！」「最後まで戦い続ける！」

「それが俺たち『仮面ライダー』だ！」

そう、彼等こそ今まで地球の平和を守り続けてきた『仮面ライダー』である。

「いくぞ！」

「オー！」「オー！」

数百人の仮面ライダーは地球を守るため大シヨツカーに向かつて行く。

「哀れな！力の差を思い知れ！」

大ショッカーもそれに受けて立つと言ったように仮面ライダー達に向かって行った。

「はっ！」

「おらっ！」

「くっ！」「くっ！」

キバはザンバットソードを、ブレイドはブレイラウザーで相手を切り倒す。

『STRICK VENT』

「はー…はっ！」

「グオオー！」

仮面ライダー龍騎は右腕に装填されたドラグクローから火炎弾を放つ。

『Clock Up』

仮面ライダーカブトは高速の世界に入り目にも留まらぬ速さで敵を倒していく。

「行くぜ、行くぜ、行くぜー！」

仮面ライダー電王はただひたすらデンガツシャーを振り回し暴れまくっていた。その他のライダー達も自分のもてる力の全てを発揮し戦っている。

そして、この戦いはライダー側が数で圧倒されていたにも拘わらず少しずつ押してきていた。

「くっ、多いな…！」

仮面ライダークウガこと“五代雄介”は気がつけば怪人達に囲まれていた。

「グオオー！」

怪人たちがクウガに襲い掛かるうとしたとき、

「はー！」

「ウエイ！」

助けに入ったキバとブレイドが怪人たちを切り付ける。

「五代さん、油断するな！押しているとはいえ敵はまだだいるんだ！」

「ゴメン、助かったよ剣崎君。」

仮面ライダーブレイドこと“剣崎一真”に礼を言うクウガ。

「ですが何か変です…」

仮面ライダーキバこと“紅渡”は今の状況に納得がいていなかった。

「確かに今僕等は少しずつではありますが確実に押してきています。でも、数は明らかに向こうの方が多い。敵だって馬鹿じゃないんだからその数を活かした策を使ってもいいのにそんな様子は全くなくただ僕等の相手をしているだけ。何か“裏”があるように思えてなりません。」

「“裏”か…」

キバの考えに少し考えるクウガ。

「渡君、ちよつとこの場を任せてもいいかな？俺は少し別行動をとる。」

「別に構いませんが、一体何を？」

「とにかくよろしく！」

クウガが親指をたてサムズアップをし、走り出した。「おい、五代さん！」

ブレイドが叫ぶがクウガは怪人達のかたまりに消えていった。

「何をする気何でしょう？」

「さーな。だが俺はあの人を信じる。今はこつちに集中するぞ。」

ブレイドはブレイラウザーを構える。

「ふっ、そうですか。ではもう僕達で片付けてしましましょう。」

キバもザンバットソードを構えブレイドと並ぶ。

「よし、行くぞ！」

「ええ」

「「うおおおー！」」

ブレイドとキバは一斉に怪人達に向かっていった。



『スキヤニングチャージ』仮面ライダーオーズこと火野映司は持っていたメダジャリバーをオースキヤナーでスキヤニングチャージする。

「はー…セイヤー！」

「ガー…！」

掛け声と同時にメダジャリバーを振り下ろし敵の怪人達に斬撃を放つ。

「よし、あと少しでこの戦いも…！！」  
ある方向を見るとオーズは驚いた。

「ひ、左さん！フィリップさん！」

オーズは近くで戦っていた仮面ライダーダブル、左翔太郎とフィリップに駆け寄る。

「おい、火野！今戦いの最中だ！集中しろ！」

「いいからあれ見て下さい！」

オーズがある方向を指差す。

「あん？」

ダブルも怪人にとどめの一発をいれたあとオーズの指差す方向を見る。

そこにはローブに身を包み顔を面で隠した男が立っていた。オーズもダブルも初めて見る人物だったが後ろに複数の怪人達を従わせていることからあれがだれなのかすぐに察した。

「おい、フィリップ。あれ…！」

『ああ、間違いない翔太郎。まさか敵の根源が直々にお出ましとは…』

「シヨツカー大首領…！」

ローブに身を包んだその人物こそ大シヨツカーを束ねる『シヨツカ

「大首領」である。

大首領の存在に気づいた他のライダー達のほとんどは「チャンスだ！」「あいつを倒せば全部終わる！」と考えていた。しかしキバは、「やはりおかしい…」と呟いた。

「今ライダー側が押しているこの状況で大首領が出て来るなんて狙ってくれと言っているようなものです。」

「お前がさっき言っていた“裏”ってやつか…」

キバは頭の中で状況を整理しつつ考えていた。

（第一なぜ敵はこの世界を襲ったんだ？この世界を襲撃すれば全ライダーが集まることぐらいわかっていたはず…。世界征服をしたのなら邪魔は少ない方がいいはずなのに…。またはあえて集めたのか？もしそうなら奴らの目的はこの世界の征服ではなく全ライダーを集めること？いや、集める意味がわからない。僕達を集めたところで何かが手に入るわけでは……………まさか！）

キバは一つの結論に達した。

「よし、大首領を倒すぞ！」「おー」「ぞ」

周りのライダーが大首領に向かって行く。

「行っては行けない！」

キバが叫んでライダー達を止めようとする。

しかし、ときすでに遅し…「掛かったな…」

大首領はニヤリと笑い両手を前にかざした。

それと同時に周りにいた怪人達が一斉に引いていった。

「な、何だ！なぜ引いて行く！」

訳がわからないライダー達。

するとライダー達の立っている場所に大きな魔法陣が現れ光り出した。そしてライダー達の体が光りに包まれる。

「な、なんだこれは！」

「か、体が！」

周りの光りのせいで視界がよく見えない。

そしてすぐに光りはおさまった。しかしライダーたちは自分達の姿

を見て驚きを隠せなかった。

「馬鹿な！」

「こ、これはどういう事だ」「変身が…解けている」

そうこの場にいる全てのライダーの変身が解けていたのだ。

「だったらもう一度変身しましょう！」

“津上翔一”は再びアギトに変身しようとポーズをとるが、

「そんな…ベルトがでない」アギトに変身するためのベルトが現れないのだ。

“乾巧”もファイズドライバーにファイズフォンを挿入するも、

「どうなつてやがる…反応しねえ！」

ほかのライダーも変身しようと試みるもやはり変身出来ない。

「ハッハッハッハッハッ！」近くにいる大首領が大声で笑いだす。

「見事に掛かってくれたな仮面ライダー！」

「て、てめえ…何しやがった！」

乾が大首領に問う。

「なに、貴様らライダーの力を頂いただけだ。」

大首領は右腕をあげるとその手の上には複数のメダルが浮いていた。

「これが何か判るか、ライダー諸君？」

大首領が馬鹿にしたような口調で問う。

「コアメダル？」

映司は呟く。たしかにそのメダルは映司がオーズに変身する際に使用するコアメダルと酷似していた。

「これはライダーメダル。貴様らがライダーに変身するための言わば力の源だ。」

大首領の言葉に渡は唇を噛む。

「嵌められましたね…。」

「渡！どういうことだ！」

訳がわからない剣崎は渡に問う。

「つまり、この戦い自体が罠だったって事です…。」

「何!?!」

「ハッハッハッ！」

大首領が再び笑いだす。

「その通りだ！我等大シヨツカーの全戦力をもって地球を攻めれば必ず全ての世界の仮面ライダーが集まるとふみこの世界を攻めた。そして思い通り貴様らは集まってくれた。まさか、これ程上手いくとは思わなかったがな！ハッハッハッ！」

「くっ！教える！お前らはそのライダーメダルをどうするつもりだ。」

剣崎が叫ぶ。

「本来、ライダーの力は何かを守る力。しかしその力を逆に使えば

『何かを破壊する力』として使えるのだ。」

「何！それはどういっ…」

「話は終わりだ。」

大首領は合図をだすと先ほど引いていった怪人たちが再び現れる。

「思えば今まで我等は貴様らライダーに邪魔され続けてきた…だがそれも今日までだ！今日この日をもって仮面ライダーは終結するのだ！」

大首領が怪人たちに『攻撃せよ』という命令を下そうとしたその時、

「ハッ！」

「何！」

大首領は背後からいきなり現れたクウガに背中から脇を通して掴まれた。

「五代さん！」

「クウガ！」

剣崎と大首領は驚きの声を上げる。

「なぜお前だけ変身を解除されていない！？」

「お前達がこういうことを考えていたのは何と無く予想してたんだ。だから俺は一人別行動をとり、お前が現れるのを待っていた。そして隙をうかがってたんだ。でも、まさか全員がライダーの力を失うとは思わなかったけどね。」

「おのれ〜」

大首領はクウガを振り払おうとするがクウガは決して手を離そうとはしなかった。

「今のこの状況で戦えるのは俺だけ…。俺一人でお前達全員を相手にすることは出来ない。だからお前達を時空間に閉じ込める！」

「何という事だ!？」

その言葉の意味は仲間であるライダーたちにもわからなかった。しかし、渡だけは、

「まさか五代さん…自分を道連れに…」

「道連れだと！」

剣崎が渡の胸倉を掴んで問い詰める。

「道連れとはどういう事だ!説明しろ渡!」

「…おそらく五代さんは自分の力を全て使って時空間に穴をあけ自分ごと奴らをその中に閉じ込めようとしてるんです…」

「何!」

剣崎は五代に向かって叫ぶ。

「やめる五代さん!そんなことをすれば…」

「大丈夫だよ」

五代は仮面の中で笑顔をつくる。

「俺の夢は世界中の人達を笑顔にすること。だからその人達のためなら俺は何だって出来る!」クウガは大首領を掴む手を強める。

「や、やめる!」

大首領は最後まで抵抗するが、

「ハーーーー!」

クウガの体が光りだす。

「五代さん!」

剣崎が叫ぶ。

「剣崎君…あとはよろしく…」

そして辺りに光が広がり思わず目を閉じる。

「うおおおー!」

そして少しすると光がおさまった。ゆっくりと目をあけるとそこにはクウガも大首領も周りにいた怪人達も消えていた。

「そんな…」

剣崎は膝から崩れ落ちる。「こんな終わり方ってありかよ！」

剣崎は地面に拳を叩き突ける。

「剣崎さん…」

渡は剣崎の肩に手をポンッと置き

「五代さんは世界を救おうとしました。自分を犠牲にしてまで…。

だから残された僕等が五代さんの分まで世界を…守りましょう」

「渡…」

剣崎は立ち上がった。

「ああ、守り続けよう！あの人の分まで！」

こうして戦いはライダーに変身する力と仮面ライダークウガ“五代雄介”を失うというかたちで終結した。これが後に言う『ライダー大戦』である。

だが、この『ライダー大戦』は数年後に起きる出来事のまだ“始まり”にすぎなかった。

## プロローグ（後書き）

駄文だった…。やっぱり小説って難しい！みんなどうやって書いてるんだろう。もし何かアドバイスなどがある人は是非コメントをお願いします！

批判などは勘弁して下さい。

## 第1話 フォーゼ（前書き）

遅くなつてすみません。

ちよつと小説の書き方変えました。



## 第1話 フォーゼ

?? 「嘘だ…こんなの嘘だ！」

仮面ライダーフォーゼこと如月弦太郎は今起きてる状況が信じられなかった。

弦太郎「頼む！誰か！何とか言ってくれ！賢吾！ユウキー！っていうか…」

弦太郎は大きく息を吸い天に向かって大声で叫んだ。

弦太郎「ここは何処だ…！！！」

そう、弦太郎は現在、何処かわからないところで一人迷子になっていた。

弦太郎「落ち着け、落ち着くんた俺！まず、何があつてこつなつたか思い出すんだ…。」

弦太郎は動揺しながら己の記憶をたどる。

~~~~~数分前~~~~~

——天ノ川学園高校——

女子生徒「キヤー！こ、こないで！」

ゾディアーツ「嫌い！全部お前が悪いんだ！」一体のゾディアーツが一人の女子生徒を襲おうとしていた。

その時、

？「まちやがれ！」

そこに弦太郎、歌星賢吾、城島ユウキの『仮面ライダー部』の3人が駆け付けて来た。

ゾディアーツ「な、なんだお前達は！？」

弦太郎「学園の平和を守る仮面ライダー部だ！」

ユウキ「体にオリオンの星座を確認！！」

賢吾「またオリオンゾディアーツか…同じスイッチが出回っていたとは…」

そう、敵のゾディアーツは弦太郎が初めて倒したオリオンゾディアーツだった。

弦太郎「お前！なんでその子を襲うんだ？」

ゾディアーツ「この女が…この女が俺をフツたからだよ！！」

オリオンゾディアーツが泣き叫ぶ。

弦太郎「フラれた腹癒せかよ…」

ユウキ「そんな理由で…」

賢吾「くだらん。」

と、三人は呆れる。

オリオン「煩い！！お前らなんか俺の気持ちが悪かったまるか  
！」

オリオンゾディアーツは再び女子生徒に襲い掛かるうとしたが既に  
いなくなっていた。

ユウキ「あ、私達が話してる間に逃げちゃったんだね。」

ゾディアーツ「き、貴様らー！」

目的の女子生徒を逃がしてしまったことに怒るオリオンゾディア  
ーツ。

オリオン「貴様らと話してたせいであの女を取り逃がした！許さん、  
許さんぞー！」

弦太郎「たく、しょうがねー、やっぱあいつには口でわからせるよ  
り拳でわからせた方が良さそうだな。」

弦太郎はフォーゼドライバーを取り出し腰に翳す。するとドライバ  
ーからベルトのようなものがでてきて腰に巻き付く。

賢吾「如月、1度倒した相手だからといって油断するなよ。」

弦太郎「わかってるって。2人とも下がってる。」

ユウキと賢吾は言われた通り弦太郎から少し離れそれを確認した弦  
太郎はドライバーについたOFF状態になっている4つのスイッチ  
ソケットを順番にON状態にする。

☐ 3、2、1

弦太郎「変身！」

カウントダウンの後、弦太郎はドライバーの右側にあるレバーを入れ右手を天に上げる。

そしてドライバーから軽快な音楽が流れ頭上にサークル状の機会のようなものが現れ回転しながら弦太郎の体を光で包む。そして弦太郎は白い戦士に姿を変えた。

尖ったロケット頭が特徴的なその戦士こそライダー大戦のあとに誕生した新たなライダー、仮面ライダーフォーゼだ。

フォーゼ「宇宙キターー！」

と万歳をするかのように両腕を上にあげながら叫んだ。そして、右手で拳を作り相手に向ける。

フォーゼ「仮面ライダーフォーゼ、タイマン張らしてもらっぜー！」

フォーゼはオリオンゾディアーツに向かって走り出しパンチを浴びせる。

しかし、敵の頑丈な体故にダメージがあまりないようだ。

それでも何度もパンチやキックを入れるが全く効いている様子がない。今度は逆にオリオンゾディアーツがフォーゼにパンチを放つ。

その威力にフォーゼは軽く後ろに飛ぶ。さらにオリオンゾディアーツは体にあるオリオンの星座が光りだしそこからいくもの光弾を打ち出す。

フォーゼ「ぐわあ！」

フォーゼはそのいくつかの光弾をくらい後ろに吹き飛ぶ。

フォーゼ「くっ、」

賢吾「如月！むやみに突っ込もうとするな！スイッチを使え！」

後ろで見ていた賢吾が指示を出す。

フォーゼ「よっしゃっ！じゃあこいつでいくか！」

フォーゼはどこからかアストロスイッチを取り出しドライバーの右から2番目にあるスイッチと入れ替えた。  
そしてそのスイッチをONにする。

『チェーンソー・オン』

フォーゼの右足に青いチェーンソーが装着される。

フォーゼ「行くぜ！」

フォーゼは駆け出しオリオンゾディアーツに右足についたチェーンソーモジュールでオリオンゾディアーツを切り付けた。

流石にこれは効いたのかオリオンゾディアーツは膝を付いた。

さらにフォーゼは攻撃を止めずチェーンソーモジュールの付いた足で連続蹴りをする。

オリオン「ぐおお！」

そのままオリオンゾディアーツは後ろに吹き飛ばされる。

フォーゼ「よし！効いているぜ！」

賢吾「如月！ランチャーとガトリングの連携でいけ！」

再び賢吾が指示を出しフォーゼは言われた通りスイッチを交換した。

『ランチャー・ガトリング・オン』

フォーゼの右足のチェインソーモジュールが消えランチャーモジュールが、左足にガトリングモジュールが装着される。

フォーゼ「喰らえ！」

フォーゼはランチャーモジュールから5発のミサイルを発射し、ガトリングモジュールから数弾の弾丸を連射する。

そして、全てオリオンゾディアーツに命中する。

大ダメージを受けたオリオンゾディアーツはもう動けない状態だった。

フォーゼ「これで最後だ！」

フォーゼは再びスイッチを交換する。

『ロケット・ドリル・オン』

フォーゼの右腕にロケットモジュールが、左足にドリルモジュールが装着される。

そしてロケットモジュールの噴射を利用して宙に浮き、もう一度レバーを入れる。

『ロケット・ドリル リミットブレイク』

フォーゼ「ライダーロケットドリルキックー！」

ロケットモジュールの噴射で加速しオリオンゾディアーツに向かっ

て急降下して行く。そのままドリルモーゼルでオリオンゾディアーツを貫く。

オリオン「うわああああ！」

オリオンゾディアーツが爆発し人間の姿に戻った。

フォーゼ「へっ、どんなもんだ！」

フォーゼはドライバーのスイッチソケットを上げて変身を解除した。

ユウキ「やったね、弦ちゃん！」

弦太郎「へへ、これが俺の実力ってやつだ」

賢吾「何が実力だ。今回はラストワン状態じゃなかったから簡単に倒せただけだ。あまり調子に乗るな。」

ユウキ「まあまあ賢吾君、少しは褒めてあげようよ。」

賢吾「ふん。ところで如月、ゾディアーツスイッチはどうした？まだ消滅させてなかっただろ？」

弦太郎「あ、忘れてた。そうだったな。でも何処飛んでったんだ。」

弦太郎はあたりを見渡して飛んでいったゾディアーツスイッチを探す。すると少し離れたところにゾディアーツスイッチを持った白い服を着た中年男がいた。

弦太郎「お、あのオッサンが拾ってくれたのか。」

弦太郎はスイッチを渡して貰おうとその男に近づく。

弦太郎「わりいなオッサン、そのスイッチ渡してくれなーかな？」

すると男はニヤリと笑い呟く。

男「これがゾディアーツスイッチ・・・」

弦太郎「え？オツサン、なんでしてんだ・・・」

男「フフフフ・・・ハッハッハッハッハッ！」

男がいきなり笑いだし弦太郎に背を向けて歩きだした。

弦太郎「お、おい。」

男「悪いがこのスイッチは貰って行く。」

そう言い放った男の前にかなり銀色のオーロラが現れ男はその中に消えていった。

弦太郎「なっ・・・」

ユウキ「う、嘘」

賢吾「消えただと！」

突如現れたオーロラの中に人が消えたという状況に弦太郎たちは混乱する。

その時、

??《仮面ライダーフォーゼ・・・如月弦太郎・・・》

突然弦太郎の頭の中から声が聞こえた。

弦太郎「だ、だれだ！俺をよんだのは!？」

賢吾「は？」

ユウキ「弦ちゃん？何言ってるの？」

どうやら他の2人には聞こえないらしい。



?? 《仮面ライダーフォーゼ・・・お前の力が必要だ・・・力を貸してくれ》

するとまたもや弦太郎たちの前に銀色のオーロラが現れる。

賢吾「またオーロラ!？」

ユウキ「ていうかあれ・・・こっちに近づいてきてない？」

そう、そのオーロラは弦太郎たちに向かってゆっくり近づいて来ていた。

そして弦太郎を飲み込み消えていった。

ユウキ「嘘・・・弦ちゃん!？」

賢吾「如月が・・・消えた・・・」

~~~~~そして今に至る。

弦太郎「そうだ!あのオーロラだ!あのオーロラに飲み込まれて、気が付いたらこんなところにいたんだ!マジで何だったんだよあのオーロラ。しかも、さっきまで昼間だったのに夜になってるし・・・  
そんな1人言を言っていると、

?? 「仮面ライダーフォーゼ・・・」

背後から声が聞こえ振り返るとそこには白いシャツの上に黒いスー

ッを着用し目にサングラスをかけた長身の男が立っていた。弦太郎はその男の声に聞き覚えがあった。

弦太郎「あんた・・・さっき俺の頭の中で俺を呼んでた人？」  
??「そうだ」

男は答える。

弦太郎「あんた・・・誰なんだよ？」  
??「俺は剣崎一真。元仮面ライダーであり、世界の管理者だ。」

## 第1話 フォーゼ（後書き）

読みにくいと思った方・申し訳ありません。

戦隊出せなかった……。本当にスミマセン？

次回確実に出します！絶対です。

ていうか次回は戦隊を主体とした物語になると思います。

いつになるかはわかりません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0504z/>

---

フォーゼ・オース・ゴークイジャーfeatゴセイジャー オールヒーロー大決戦

2011年12月24日01時50分発行